

2017 年度（2018 年 3 月）

Diploma Policy に関わる卒業（観点別・就業力）アンケート結果について

長崎外国語大学では、卒業認定・学位授与の方針（Diploma Policy）については以下のように定めている。

長崎外国語大学では以下のような能力を身につけ、かつ所定の単位を修得した学生に、卒業を認定する。

- (1)学部共通カリキュラムの多面的履修を通して、基礎的な学習能力を養うとともに、人間・社会・自然に関する知識を自らと関連付けて理解し、専門領域を超えて問題を探求する姿勢を身につける。
- (2)学科における体系的学習と学科を横断する幅広い学習を通して、外国語の運用能力と専門分野の知識を獲得し、地域や現代世界の多様な課題を発見、分析、解決に導く能力を身につける。
- (3)4年間にわたる教室内での学びや、プロジェクト科目、海外留学、卒業論文等の作成を通して、知識の活用能力、批判的・論理的思考力、コミュニケーション力、課題探求力、問題解決力、リーダーシップなどを総合する力を身につける。

かかる Diploma Policy（以下 DP）に基づいて Curriculum Policy（学士教育課程の編成方針）が設計されることになるが、DP において学生が身につけるべき能力をカリキュラムマップ上において科目群毎、各科目毎に明示している。つまり、教育課程編成上のどの科目でどのような能力が養われるのかを明らかにしている。身につけるべき能力を5つの観点によるカテゴリーに大分類し、さらにその5つのカテゴリーを小分類化して教育課程上に科目を位置づける（カリキュラム・マップ）ことによって、学生たちが養うべき能力を見極めながら科目の選択を行える体制をとっている。（DP による5つの観点はシラバス上に記載してある。）

卒業時に行うこのアンケートは、1年生秋学期から毎学期行われているもので、DP に関わる本学での4年間の学修に対する学生による最終的な自己点検評価であり、本学の3つのポリシーに新たに加わるアセスメント・ポリシーに関わるものである。このアンケート結果によって、さらなる3つのポリシーの改訂や教育課程の編成などに生かしていく所存である。

次ページ以下では、各カテゴリー別に簡単ではあるがコメントを付している。なお、本報告は、学科毎ではなく、2学科あわせた学部（卒業生 121 名のうち回答者 95 名：回答は実数）としてのアンケート結果によるものである。なお、アンケートは以下の観点別能力についての自己点検評価として回答を行う。

教育支援部長

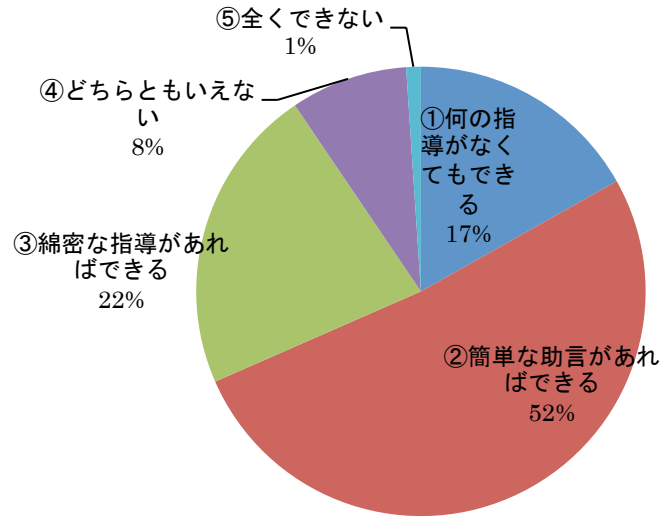
山川欣也

2018年8月20日

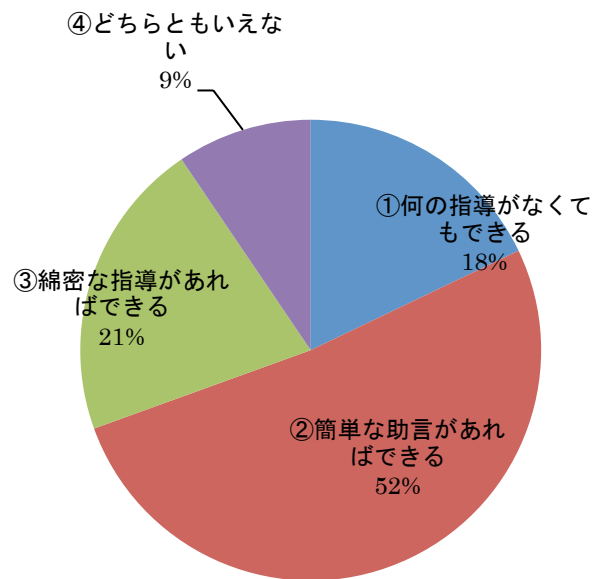
		①何の指導がなくてもできる	②簡単な助言があればできる	③綿密な指導があればできる	④どちらともいえない	⑤全くできない	無回答	合計
カテゴリ A [理解し、知識を取り込む力]	1. 歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。	16	49	21	8	1	0	95
	2. 専門分野における知識を体系的に理解し、実践に応用することができる。	17	49	20	9	0	0	95
	3. 進路の多様性や特質について理解し、自らの進路選択に効果的に活用することができる。	27	47	16	5	0	0	95
カテゴリ B [論理的思考力・問題解決力]	4. 情報や知識を多角的な視点から論理的に分析し表現できる。	23	48	17	7	0	0	95
	5. 論理的思考に基づき、様々な状況に応じて的確な判断を下すことができる。	24	43	22	6	0	0	95
	6. 問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。	22	51	14	8	0	0	95
カテゴリ C [態度・意欲]	7. 自らを律し、自立して積極的に行動できる。	53	27	13	2	0	0	95
	8. 異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。	51	33	8	3	0	0	95
	9. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。	43	38	10	4	0	0	95
カテゴリ D [コラボレーションとリーダーシップ]	10. 目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。	54	29	9	2	1	0	95
	11. 目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。	46	35	13	0	1	0	95
カテゴリ E [効果的なコミュニケーション力]	12. 日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。	38	40	12	5	0	0	95
	13. 少なくとも一つの外国語を用い、正確にコミュニケーションを図ることができる。	34	42	16	3	0	0	95
	14. 情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。	31	37	19	8	0	0	95

カテゴリ A [理解し、知識を取り込む力]

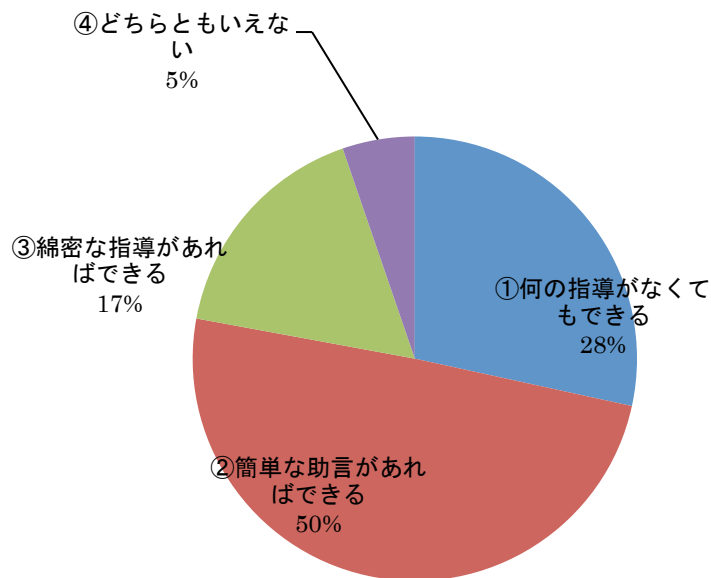
1. 歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。



2 専門分野における知識を体系的に理解し、実践に応用することができる。



3. 進路の多様性や特質について理解し、
自らの進路選択に効果的に活用することができる。



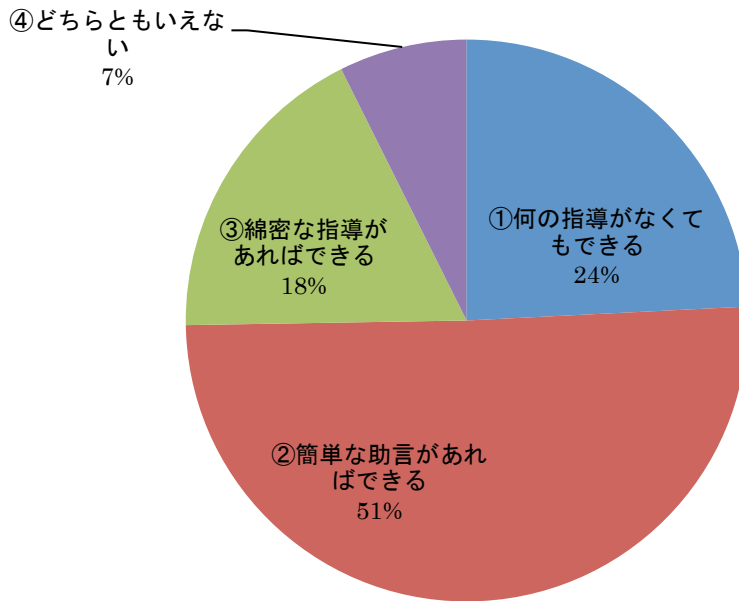
カテゴリAは、いわゆる知識や教養を身につける力、インプット能力の自己評価である。

昨年度まではほぼ同様の傾向が見られる。「何の指導がなくてもできる」と「簡単な助言があれば・・・」と自己評価した学生は、おおよそ大きな変化が見られないように思われる。依然として、主体的学びに向けた学修面での何らかのサポートやアドバイスと言った「助言」が必要とされているようである。これまでと同様、明確な誘導や簡単な指導に従うことなしに、必要とする情報や知識を獲得したり、これを適切に活用したりすることは難しいと自己評価している学生がやはり多いことを意味している。多角的で多様な情報や知識の中から、自分なりに取舍選択しながら必要なものを取り込む際の主体が確立していないことが課題かもしれない。ただ、「全くできない」と回答した学生がいたことは本学的課題である。

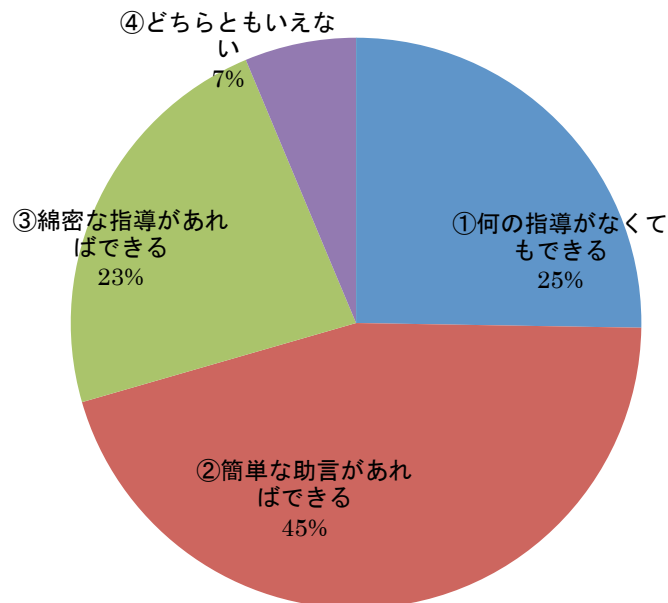
主体的な学びを育むことが求められていることから見れば、カテゴリAにおける「何の指導がなくてもできる」割合を向上させていくためにはどうすれば良いのか、知恵を出し合うことが必要だろう。

カテゴリ B [論理的思考力・問題解決力]

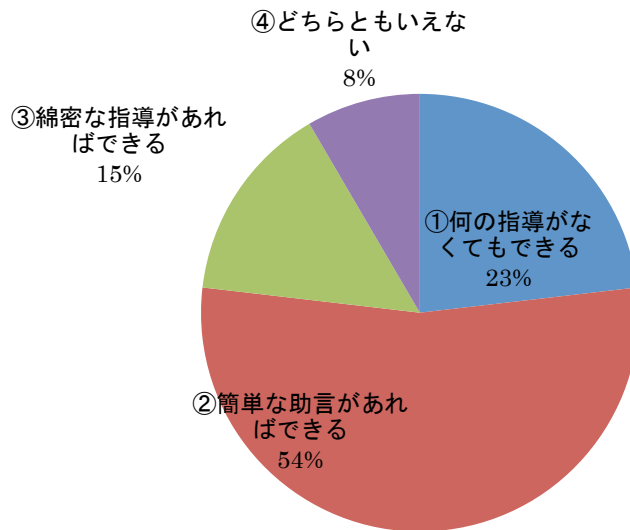
4. 情報や知識を多角的な視点から論理的に分析し表現できる。



5. 論理的思考に基づき、様々な状況に応じた的確な判断を下すことができる。



6. 問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。

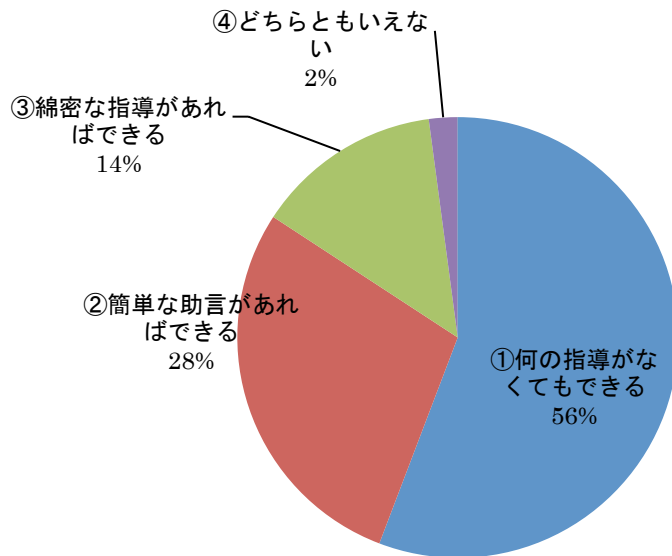


カテゴリBは、発見力・分析力・思考力・判断力・意志決定力・課題解決力などに関する自己評価である。今年度は3つのカテゴリとも4人に1人（昨年度は回答者のおよそ3人に1人、もしくは4人に1人）が「何の指導がなくても」論理的に思考できたり、物事を論理的に分析し判断を下したり、問題を解決できると評価している。しかしながら、「助言があれば」と答えた学生を合わせても、昨年度よりもこの3つのカテゴリでの評価は下がっている。カテゴリAと同様、主体的学修力育成の観点からすれば、このカテゴリも「何の指導がなくてもできる」学生たちを輩出するためにどうすれば良いのかが課題である。

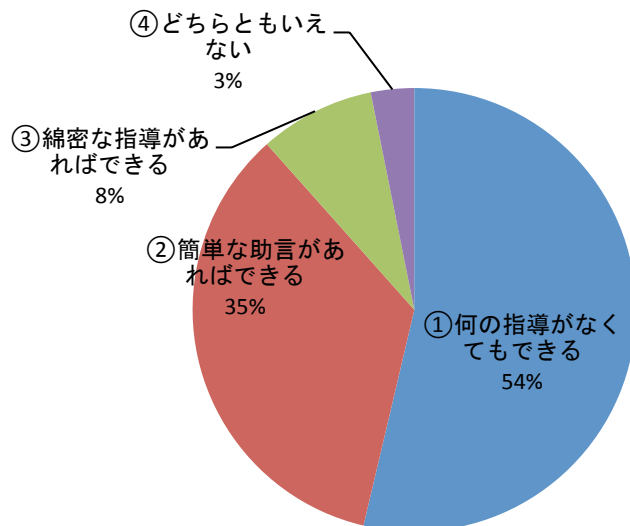
なお、このカテゴリでは「全くできない」と回答した学生がいなかったことは良かった。

カテゴリC [態度・意欲]

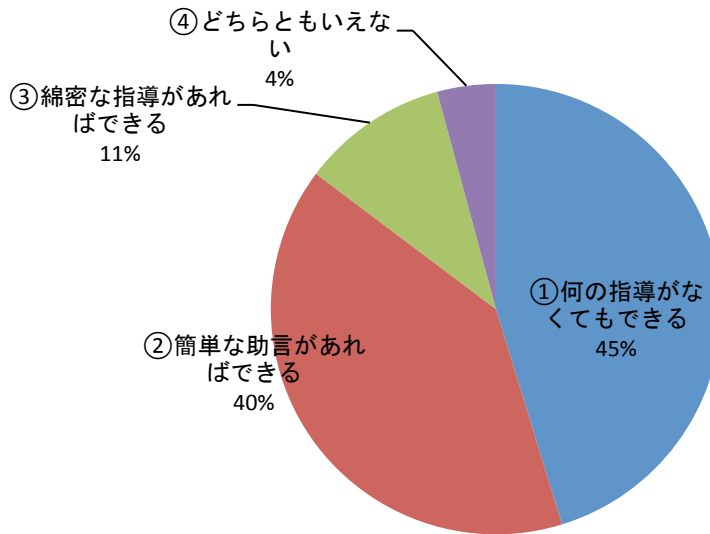
7. 自らを律し、自立して積極的に行動できる。



8.異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。



9. 社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。



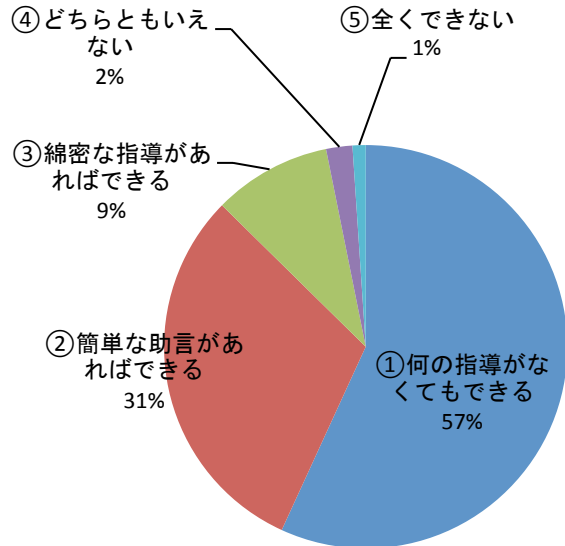
カテゴリCは、行動力や積極性、認識力や社会性などに関する自己評価である。

他のカテゴリに比べて、「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせると、4人に3人が積極的に行動できる、また異文化交渉に問題を感じないと自己評価している。また、昨年度と比べると、カテゴリCにおいて特に今年度の卒業生は前向き、積極性、意欲が高いと自己評価していることが分かる。本来的には、必要な知識や教養を携えた上で積極的な行動力を示したり、異文化への理解を深めたりしてもらいたいところであるが、まずは行動するという本学学生の特徴が、今年度は特に如実に表れているカテゴリと言えるのではないだろうか。

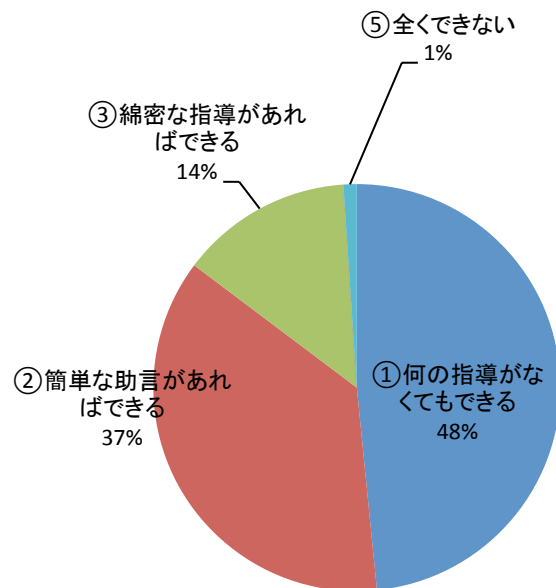
なお、このカテゴリでも「全くできない」と回答した学生がいなかったことは良かった。

カテゴリ D [コラボレーションとリーダーシップ]

10. 目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。



11. 目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。



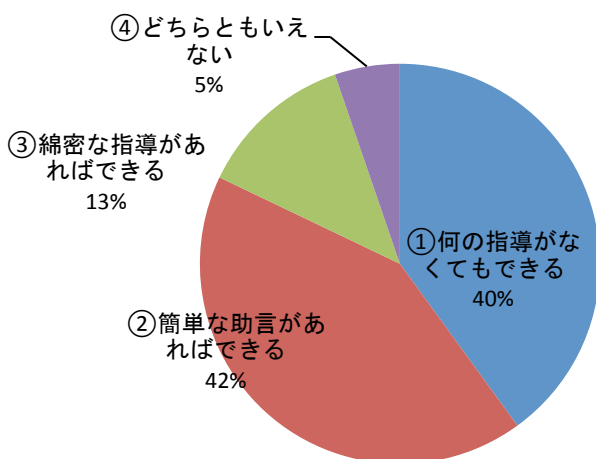
カテゴリDは、協調性や協働力、実現力や率先力などに関する自己評価である。

「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせると、ここでもおよそ4人に3人が目標に向かって協調的な行動ができる、また統率的行動能力や目標実現力があると自己評価している。協働力と率先力は、一見するとかち合うように思われるが、組織的目標実現行動における能力として求められるものであり、本学の学生たちがその両方において高い自己評価を与えていることは心強いものがある。

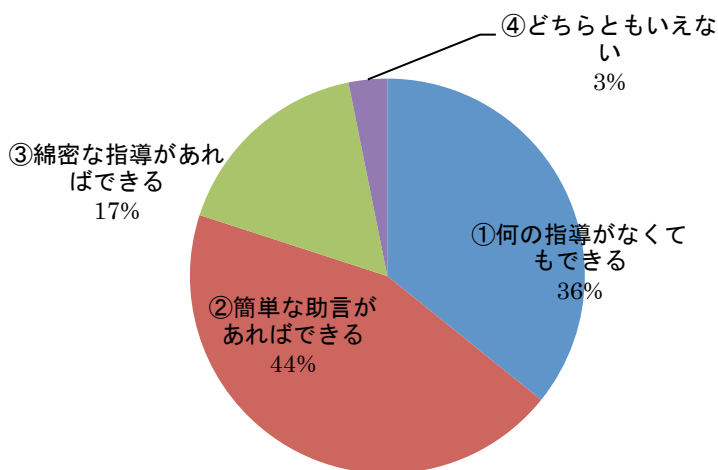
なお、カリキュラムマップにおいて本カテゴリの能力を育成する科目がきわめて不足しているにもかかわらず、それでもなお本学学生の自己評価の高い本カテゴリ能力を伸ばすためにも、教育課程における科目設計が必要だと考える。

カテゴリE [効果的なコミュニケーション力]

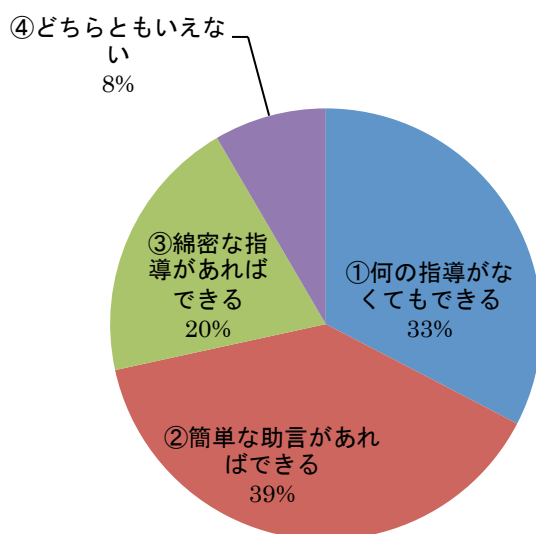
12. 日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。
また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。



13. 少なくとも一つの外国語を用い、
正確にコミュニケーションを図ることができる。



14. 情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。



カテゴリEは、コミュニケーション力や表現力、ITCなどに関する自己評価である。

本学においても重要なカテゴリと言える。日本人学生と留学生も含めての回答であるが、項目12と13において、少なくとも「何の指導がなくてもできる」「簡単な助言があればできる」を合わせて90%以上の数字がほしいところである。表やグラフにはなっていないが、専修言語別の回答を確認してみても、専修言語毎で回答の割合に大きな変化は見られなかったもので、ここで示されているグラフは本学の全般的な傾向を表していると見て良い。カテゴリA・Bと併せて考えてみれば、どうも教養、専門、言語の学修成果に関して自信がなかなか持てないと自己評価している学生たちが多いと言えるのかもしれない。その他のカテゴリの成果を活かすためにも、これまでと同様に、この点はやはり検討課題となろう。

ITC に関しても同様に、もっと高い数字が出てくると予想されたがそうではなかったのは、昨今のPC 離れとも言われている現状を示しているようである。12、13 は昨年度とほとんど変わらないが、14 における①は変化がないが、②の「助言があれば」が昨年度より10%増加していることは何かを示唆しているのであろうか。実際、携帯を ITC の道具とし、PC に触れていない1年生も出てきている。いまだPC が ITC の主要機器である以上、情報教育はむしろ今以上に必要になるのかもしれない。

カテゴリA から B について「何の指導がなくてもできる」および「簡単な助言があればできる」との回答は7割台で、カテゴリC、D、E についてはおおよそ8割台の回答率となっており、それぞれのカテゴリでコメントしたように、こうした点が本学学生の特徴であるといつてよいのだろう。これに加えて他のカテゴリも向上するような教育課程編成へとつなげたいものである。

(以上)